

歴史展示へのマンガ導入の試み —萩博物館企画展「古写真で見る幕末明治 海外渡航者編」を事例に—

※道迫真吾

はじめに

萩博物館は令和5年（2023）3月18日から6月18日まで、長州ファイブ英国渡航160年記念企画展「古写真で見る幕末明治 海外渡航者編」（以下では「本展」）を開催した。本展は、当館の歴史展示で完全オリジナルのマンガ（漫画）を導入した初めての事例となった。

ところで、萩博物館は、平成30年（2018）に開催した明治維新150年記念特別展第1弾「手塚治虫が描いた明治維新」においてマンガを展示したことがある。この展覧会は、手塚プロダクションの企画協力により、手塚治虫の作品『陽だまりの樹』のほか、『新選組』や『シュマリ』⁽¹⁾といった公表済みのマンガの原画を展示したもので、萩博物館でマンガを取り扱う展示はこの時が初めてであった。なお、近年は、雑誌や単行本を通じて人気のあるマンガ作品を取り扱う展覧会が全国各地の博物館・美術館で増加傾向にあり、マンガ作品あるいはその原画の展示・公開は活況を呈しているようである。実際、マンガ専門の博物館や美術館が増加しているほか、マンガを資料として収蔵・公開する博物館の例も見られる⁽²⁾。

しかし、本展のように、いわば展示の補助ツールとして、新規に制作したマンガを展示する事例は、まだあまり見られないのではないと思われる。本稿は、本展を通じて得られたマンガ導入の成果はもとより、問題点についても、記録として残すことを目的とするものである。

1 展示の趣旨と構成

本展の趣旨と構成について概要を記しておきたい。まず、展示の趣旨は次のようである。

文久3年（1863）5月、長州藩は井上馨・山尾庸三・井上勝・伊藤博文・遠藤謹助の5名をイギリスへ密かに送り込んだ。日本人の海外渡航が禁じられた「鎖国」の時代、彼らは国禁を破って密航留学し、帰国後は日本の近代化・工業化に多大の貢献をしたことから、現在は「長州ファイブ」と称えられている。また「長州ファイブ」以外にも、幕末から明治にかけて多くの人々が海外へ渡った。海外渡航者たちは、西洋諸国で見聞を広め学ぶことにより、日本の針路を定めるための大きなヒントを得たのである。本展では、海外渡航者たちの雄姿を写した肖像写真とともに、写真に秘められた逸話についてもわかりやすく紹介した。

展示はⅠからⅢまでの3つのパートに分けて構成した。その骨子は以下の通りである。

Ⅰ 長州藩密航留学生「長州ファイブ」

江戸時代、徳川幕府は「鎖国」政策の一環として日本人の海外渡航を禁止していた。しかし、嘉永6年（1853）のペリー来航後、西洋諸国との条約締結をはじめ、軍備の近代化など、様々な課題が浮上する。幕府はそれらに対処すべく、外交使節や海外留学生を派遣した。

その一方、長州藩や薩摩藩などの有力諸藩は、正規のルートで幕府外交使節に藩士を同行させるほか、秘密裏に海外留学生を送り出し、独自に近代化への方策を模索した。そのさきがけとなったのが、長州藩密航留学生「長州ファイブ」である。

Ⅱ ドイツに留学した陸軍軍医「森鷗外」

森鷗外は、明治・大正期に活躍した日本屈指の文豪である。しかしその一方、森林太郎の名で、陸軍軍医としても大きな足跡を残した。

鷗外は文久2年（1862）津和野藩の藩医の長男として生まれた。明治5年（1872）父静男とともに上京し、ドイツ語を学んだ。明治14年、20歳で東京大学医学部を卒業し、ただちに陸軍軍医となる。明治17年、ドイツ留学の念願が叶って渡欧した。鷗外は、世界最先端の医学を身につけ、陸軍軍医総監・陸軍省医務局長にまで昇進、軍医としても栄達を遂げたのである。

Ⅲ 専門知識を学んだ多様な海外渡航者たち

幕末から明治にかけては、日本の近代化のため、西洋諸国へ積極的に人材が派遣された。明治初期までは、国防という観点から軍事関連の知識・技術の習得を最重要課題としていた。

しかし、近代国家の形成には軍事以外の様々な要素が不可欠であることから、明治中期以降は政治・法律・軍事・金融・医学・建築・芸術など、専門知識を学ぶ人々が西洋へ渡った。明治の海外渡航者たちは、幕末の海外渡航者たちが果たした西洋文明の紹介者という役割を一段階乗り越え、実用的な能力を身につけて日本へ帰ったのである。

2 マンガ導入の目的と内容

企画展にマンガを取り入れてはどうかというアイデアは、筆者が出したものでなく、展示制作業務の受託者である株式会社コア（以下では「コア社」）から提案されたものである。コア社から出された意見は、学芸員の説明を聞くとわかりやすいが、それを文字による解説パネルにした場合、来館者が理解するには難しくなる可能性が高く、それよりはビジュアルで身近なマンガにしたほうが、誰が見ても理解がしやすくなるのではないかと、いうものであった。しかも、幸運なことに、コア社はマンガ制作が可能な人材を擁していたため、この提案が一気に実現することになったのである。

先に示したように、展示は3つのパートに分かれているため、それぞれのパートにバランスよくマンガのパネルを配置できるように心がけた。制作にかかる時間や費用などとの兼ね合いを考慮し、オリジナルマンガは4種類とした。マンガの題材はコア社との協議で大まかに選び、細かいストーリー構成は筆者が作成した。4種類のマンガは次頁に掲げる通りであるが、マンガに関するエピソードをより詳しく知りたい方に向けて、それぞれのマンガについて簡単に背景を説明する文章を添えた。その説明文は次に示す通りである。

エピソード1 山尾庸三 イギリスへ密航当日の横浜での秘話

文久3年（1863）5月のある日、山尾庸三は、英国ジャーディン・マセソン商会の横浜支店「英一番館」の責任者ガワーに、極秘裏に密航の相談をした。山尾らは、ガワーの用意した洋服を着て鬘を切り、ガワーの指定した通りに英一番館に出向くと、ガワーは支障があるので延期したいと述べた。それに対して山尾らは、西洋人の格好になったので今さら引き返せないと強硬に主張し、密出国を果たした。文久3年5月12日未明のできごとであった。

エピソード2 森鷗外 ドイツにおける日本人医学者たちとの交流

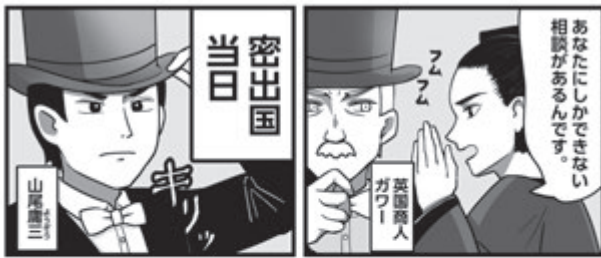
森鷗外は、明治17年（1884）10月から明治21年7月までの4年弱、ドイツに留学した。ライプツィヒに始まり、ドレスデン、ミュンヘンを経て、最後は明治20年4月から明治21年7月までベルリンに滞在した。その間の明治21年6月3日、ベルリンに、鷗外を含む19名の日本人医学者たちが集まった。鷗外は、そこで出会った山根正次に自分の写真を贈っている。当時欧米では、名刺代わりに自分の写真を交換する風習があったのである。

エピソード3 山根正次 オーストリア人大学生との真剣勝負

明治21年（1888）オーストリアの首都ウィーンでのできごとである。山根正次は9月12日、友人とともにコーヒー屋でビリヤードを楽しんでいたところ、現地の大学生に下手だと冷笑され口論になり、決闘を受けて立つ。翌13日早朝、シェーンブルン宮殿の庭園で、大学生はサーベル、山根は日本刀で真剣勝負。山根は顔面にかすり傷を負うも大学生を撃退し、友人とともに馬車で下宿に帰ってビールで祝杯をあげ、記念写真におさまったのであった。

エピソード4 山川捨松 アメリカへ渡った日本最初の女子留学生

明治4年（1871）日本最初の女子留学生が誕生した。西洋諸国へ派遣された岩倉使節団は、会津藩家老の娘であった山川捨松（12歳）のほか、津田梅子（8歳）・永井繁子（9歳）・吉益亮子（16歳）・上田梯子（16歳）の5名を同行したのである（年齢は出発時の数え年、諸説あり）。捨松はアメリカで学び、明治15年（1882）梅子とともに帰国。のちに梅子が創立した女子英学塾（現津田塾大学）を支援するなど、女性の教育と社会進出に尽力した。



Episode1 山尾庸三



Episode2 森鷗外



Episode3 山根正次



Episode4 山川捨松

3 マンガ導入の成果

本展の主要展示資料は、幕末から明治にかけて海外へ渡航した多数の人物の肖像写真であり、マンガはその補助解説用に制作したものである。マンガは、観覧者が展示場で立った状態で読むことを前提に考えねばならないため、コマ割りの数を少なくし、一覧性を重視する必要があった。そして何より優先されるのは、博物館における展示であるため、マンガは史実に基づいていなければならないという点である。このため、エピソード1～4のマンガそれぞれについて、筆者が歴史資料にもとづいて作成したストーリーをマンガ制作者に提示し、マンガのラフな原案が出てきた段階で筆者がチェックして修正を指示し、その後も何度かの校正作業を経て完成に至った。マンガの根拠とした歴史資料及び史実などは、次のようである。

エピソード1：山尾庸三自らが後年語った談話記録⁽³⁾

エピソード2：森鷗外が自分の写真を山根正次に送っていたという史実

エピソード3：山根正次自らが肖像写真の裏面に書いた記録⁽⁴⁾

エピソード4：山川捨松（大山捨松）が日本最初の女子留学生であるという史実

上記を比較すると、エピソード1と3は、そのことを直接裏付ける逸話や記録が残されているが、エピソード2と4は、前二者のように直接の資料があるわけではなく、研究書などの文献から得られる情報をもとにストーリーを構成しており、エピソードごとに根拠とした歴史資料の性格が異なる。このことについてはのちほど問題点として触れるが、それぞれのマンガに工夫を凝らしたので展示の雰囲気は和らいだと思う。現に観覧者に尋ねたアンケート調査では、「マンガが分かりやすかったです」という記入のほか、「（展示が）わかりやすかった」という意見が多かった（アンケート回答数は総来場者8,703人中74人）。

本展の関連イベントとして、「長州ファイブデジタルスタンプラリー」を実施した。これもコア社から提案されたもので、簡潔に言えば、スマートフォンを利用するスタンプラリーであった。スタンプスポットとして、萩・明倫学舎、萩駅舎「萩市自然と歴史の展示館」、松陰神社宝物殿至誠館、松陰記念館（道の駅 萩往還）の4施設より協力を得、萩博物館を含めて5か所に専用のパネルを設置した。景品用に、本展のオリジナルマンガをあしらったポストカードを4種類作製し、展示室でしか見ることのできないマンガを持ち帰ることができるようにした。これを受けて、スタンプラリーは、実施期間を3期に分け、各期5問ずつの問題にすべて正解した方に景品を1枚進呈することにし、3期で15問すべてに正解した方にスペシャルカードとして4枚目を進呈するという仕掛けにした。景品は100人分用意したが、実際に配布できたのはほぼ半分で、想定よりかなり少なかった。アンケート回答のなかには、観光で来ており、車の運転が難しい身としては、道の駅がチェックポイントになっているのは少し厳しく思いましたという旨のコメントもあったため、この点については大いに反省している。

4 マンガ制作の問題点

筆者はかつて、萩市が出版したマンガ『長州ファイブ』⁽⁵⁾の企画構想を担当したことがある。その時にも感じたが、文字で文章を書くことと、マンガを描くこととは、視覚的情報の有無の点で決定的に異なる。マンガは、絵とセリフで構成されるため、可能な限り当時の状況を再現すべく、人物の身なりや背景に至るまで、豊富な資料を必要とするからだ。しかし、根拠となる資料がない場合は、どうしても想像もしくは軽度な創作が入ることになる。

そのような観点から最も困難だと感じたのは、エピソード2の森鷗外と山根正次の写真交換の場面である。山根正次の残した資料群の中に森鷗外の肖像写真があるので、森が山根に写真を贈ったことは間違いない。ところが、二人が明治21年6月3日、ベルリンの写真館で写真を交換したことを裏付ける根拠はあるのかと問われると、筆者にその持ち合わせはない。森の肖像写真の裏面に日付は書かれていないし、森がベルリンに滞在していた間に記していた「隊務日記」⁽⁶⁾にも写真撮影や写真交換の記述は見当たらないからである。なお、森と山根のベルリンでの出会いについては、すでに別稿で詳細に検討したので、ここでは割愛する⁽⁷⁾。

したがって、このマンガではあくまでも推測の範囲内で、森と山根が写真を交換したという出会いの場面を設定せざるをえなかった。もちろん、マンガには西洋における写真交換の風習を紹介する役割も持たせているが、如上の問題も含みつつ、マンガ制作に臨んだということをここに記載しておきたい。

おわりに

展示に利用される媒体は、近年ではマルチメディア化が著しく、映像や音響が利用されるのはごく普通になってきた。そうしたなかで、マンガの歴史展示への導入は、個人的には積極的に進めたいと考える。しかしながら、それに際しては、マンガを描ける人材とストーリー構成を書ける人材の確保、歴史資料・背景資料の準備、歴史・風俗考証など、多数の条件を満たさなければならない。こうしたことをクリアできれば、オリジナルマンガは、今後も来館者に対してわかりやすい歴史展示を提供するために、使いたいツールの一つである。

註

- (1) 展示した手塚治虫作品の概要は次の通りである。『陽だまりの樹』は、『ビッグコミック』（小学館）に昭和56年（1981）から昭和61年まで連載、幕末から明治にかけての激動の時代、武士として滅びゆく生き方を貫こうとする伊武谷万二郎と、伝統医学と対抗しつつ近代医学の道を切り拓くために奮闘する手塚良庵との対比的な二人を中心にストーリーが展開する。『新選組』は、『少年ブック』（集英社）に昭和38年（1963）に連載、浪士集団に父を殺害され、近藤勇の新選組に参加し復讐に燃える深草丘十郎を描く。『シュマリ』は、『ビッグコミック』に昭和49年（1974）から昭和51年まで連載、旧幕臣で剣の達人シュマリが北海道に渡り、アイヌの人々に敬意を抱き、文明開化の波に背を向け北海道で愚直に生きることを選んだ生涯を描く。
- (2) マンガを取り扱う展覧会の数は枚挙に暇がないので割愛するが、平成7年（1995）に開館した秋田県の横手市増田マンガ美術館は、マンガを専門とする博物館・美術館の代表例として知られ、同館ホームページでは「日本で最初の「マンガ原画」を専門とした美術館」を標榜している（<https://manga-museum.com>, 2023年10月27日閲覧）。一方、神奈川県のカサキ市民ミュージアムは、同館ホームページでマンガ資料コレクションを公開しているが、同館は令和元年東日本台風の被害により、当面の間、施設は休館中である（<https://www.kawasaki-museum.jp>, 2023年10月27日閲覧）。
- (3) 山尾庸三の談話記録は、拙稿「萩博物館所蔵山尾庸三関係資料—翻刻と目録（抄）—」（『萩博物館調査研究報告』第13号, 2018年）に全文を翻刻した。その後、その談話にもとづき、拙稿「山尾庸三が語る「長州五傑」英国密航秘話（上・下）」（『龍馬タイムズ』東京龍馬会, 第144・145号, 2023年）を執筆した。
- (4) 山根正次写真の裏書は、拙編『幕末明治の洋行者たち—萩博物館所蔵古写真集成（2）—』（萩博物館, 2013年）に全文を翻刻した。その後、その裏書にもとづき、拙稿「山根正次の洋行と決闘事件—ウィーン留学中の真剣勝負—」（『新・史都萩』第49号, 2013年）を執筆した。
- (5) 三宅紹宣監修・桐木憲一まんが執筆『長州ファイブ 日本の近代化・工業化に挑んだ男たち』（萩・明治維新150年記念事業実行委員会, 2018年）。
- (6) 「隊務日記」（森林太郎『鷗外全集 著作篇 第20巻』岩波書店, 1937年）。
- (7) 拙稿「森鷗外と山根正次—萩博物館企画展「古写真で見る幕末明治 海外渡航者編」より—」（『新・史都萩』第83号, 2023年）。

謝辞

マンガを含む展示制作に携わられた株式会社コアの皆様には厚く御礼申し上げます。

※どうさこ しんご 萩・明倫学舎 兼 萩博物館 総括学芸員